

# わらじ 草鞋作りを支える人たち

主幹 中村 昌子

若葉の緑がまぶしい、気持ちのよい季節となりました。5月の中旬から大泉小学校では各学年の遠足・移動教室が目白押しです。既に1・2年生の遠足と4年生の富浦移動教室は終了していますが、東京近郊でも、緑や自然豊かな場所で、仲間と共に楽しい時間を過ごすことができたことでしょう。そして、雨で本日に延期になった3年生の遠足、今週29日からの5年生の箱根移動教室、6月初めの6年生日光移動教室へと続いて行きます。さて、移動教室の中でも、本校独自の様々な活動がありますが、伝統的に続いているものとして5年生の箱根旧街道わらじ（草鞋）ハイクがあります。東海道の箱根越えと言え、昔の旅人にとっては難所の一つです。子どもたちは、自分たちで草鞋を編み、その草鞋をはき、竹の皮にくるんだ塩むすびを背中にしょって箱根旧街道を歩き、昔の人々の苦労やそれぞれの思いに触れる体験をします。

当日のハイキングはもとより、5年生たちが乗り越えなければならない難所として、草鞋作りがあります。4月の後半になるとわらで縄を<sup>ない</sup>編み、草鞋を編み始めます。この活動は毎年6年生から5年生へと引き継がれ、毎年「草鞋講習会」が行われています。昨年度草鞋を編んだ6年生は、自分たちの苦労を思い出しながら、手を取り、足を取りながら編み方を伝授していきます。初めての5年生が一番苦労するのは、数本のわらで1本の太い縄を編む作業です。自分の身長より長い縄を作るために悪戦苦闘して取り組みます。本当は講習会までに終わらせなければいけない作業なのですが、なかなかそうはうまくいきません。いっしょに縄を編むところから取り組んでいるグループ、ある程度縄ができあがっていて、着々と編み始めていくグループ。個人差はありますが子どもの手から子どもの手に伝わる伝統ある草鞋作りの中で、個性豊かな「マイ草鞋」ができあがっていきます。大泉の草鞋作りはこのようにして子ども同士が支え合って続いてきたのです。実際、旧街道で歩き始めるとすぐに壊れてしまう子、かかとだけすり切れてしまう子、最後まで丈夫で歩き通せる子。様々な草鞋模様ですが、草鞋から伝わる石畳のひんやりとした感触、ぬかるみでしみてくる冷たい泥水など、現代の靴では体験できない草鞋のよさを味わいます。そしてこのわらをもう20年近く送ってくださっている方がいるのですが、先日お会いする機会がありました。もう85歳を越えられているのですが、元気に農作業をされていました。すると「今、『草鞋のわらが（子どもたちに）届くまで』の過程を記録しているんだよ。」と教えてくださいました。ちょうど今、田植えの季節です。これから稲が育ち、稲刈りをし、その稲わらを天日干しにして丁寧に送ってくださっているのです。「結構手がかかっているんだよ。もう歳だからいつまで続けられるかな。それも知ってもらいたくて記録しているんだ。」と笑って話してくださいました。学校で受け継がれる伝統と共に、それを陰で支えてくださっている方たちの力があることを、いつかその『草鞋のわらが届くまで』の映像が完成する頃に、子どもたちに伝えられればと思うばかりです。

